

津谷喜一郎・長澤道行 著

## 『医療にみる伝統と近代——生きている伝統医学——』

本書著者の津谷喜一郎氏は、現在、東京大学大学院薬学系研究科客員教授を勤め、長澤道行氏は同大学院同系同科において特任研究員の任に就いている。津谷氏は、1984年からほぼ5年間、WHO西太平洋地域事務局初代伝統医学担当医官をつとめた経験を持ち、R.バンナーマン、J.パートン、陳文傑『世界伝統医学大全』(1995年、平凡社)の翻訳でも知られるごとく、長年、いわゆる「伝統医学」に関わってきた。

本書は全7章より成る。各章のタイトルは、第1章「まず混沌から」、第2章「生きている伝統医学」、第3章「ボストン伝統医学十景と変わりゆく景色」、第4章「経済的視点：日本におけるコスト統計」、第5章「倫理的視点：近代医療と代替医療の対比」、第6章「構造的視点：元氣と病気の間」、終章「医療の捉え方」である。

構成は極めて端正である。章ごとに問題を絞り込み、明確な方法論によって導かれた結果を図示し、「結論」「考察」「まとめ」「補論」で結ぶ。随所で前段の内容をまとめつつ、後段の目的を明示しており、読者は無理なく読み進むことができる。終章第1節で第1章を承けることで、全体も整合性をもって構成されている。

構成の端正さもあり、本書は「いわゆる伝統医学を研究するにあたっての、これ以上は望めない、最高の叩き台である」というのが、評者の、一読しての感想である。「伝統医学」とは、呼称からすでに混沌の様相を呈するが、第一章で1979年に開催された「第1回国際アジア伝統医学大会」によって定義された「SWIMでないもの(SWIMとは、Science, Western Origin, Internationally distributed, Modern content)」の意味によって用いることを明らかにしている。

この例のように本書は、用語ひとつにさえ明確さを欠き、地に足のつかない議論に終始していた「混沌＝伝統医学」研究に、首肯し得る妥当性をもった根拠を示しながら科学的な方法で解析し、

飛躍のない結論を提示してみせるのだ。

キーワードの一つともいうべき「混沌」という言葉が使われているのは、第1章から第3章までと第6章第7節以降であり、索引によれば17回を数える。ちなみに、これと同程度使用される言葉は「エビデンス」(22回)、「がん」(22回)、有効性(22回)、安全性(17回)である。

「混沌」とは、『莊子』応帝王篇に記された、目も口もない存在の名前であり、儼と忽に「七竅」を穿たれ、命を落とす。本書は「伝統医学」という「混沌」に目鼻をつけてはいるが、それは混沌を活かすためだ。「医療を混沌のイメージから始めてそのまま内部に混沌を残せる捉え方を許容する余裕なくして、前進の一步は踏み出せないのではないかと考える」と終章末でいうとおり、全ての「伝統医学」さらには「医療」全体に対して徹底的に肯定的な、しかし盲目的ではない愛情を持って、緻密な分析を加えている。

第2章・第3章においては、津谷氏の見聞きした、アジア諸国とアメリカ・ボストンにおける伝統医学の現状について記す。記述が明晰であり、経験や印象であってもデータとしての説得力を持っている。

第4章から第6章までは、現代日本の伝統医学を考察するため、「コスト」「倫理」「構造」という3つの視点を定めている。「コスト」では西洋近代医学と伝統医学に国民がかけたコストのうち、公的医療保険制度の対象か否かによって4種類に分け、ジャンルごとにそのコストを試算する。「倫理」を説くために「倫理とは何か」から問い直したうえで、「代替医療は資源の適正な配分になっているか」「有効性・安全性が不確かな代替医療を医療従事者として薦めるのは倫理的か」「代替医療を好む市民の自己決定権の評価をどうすべきか」について答えを出す。「構造」では各種の医療をある「状態」への「介入」によって得られる「アウトカム」ととらえ、「元氣と病気の間」につ

いて記すことで「医療」そのものの構造を描き出す。終章では、医療そのものの外延がいまいなものであることを示し、医療のとらえ方についての問いかけで閉じられる。

「医療」の概念と実態をより立体的にとらえるために本書の不足を補うとすれば、異なるデータを用い異なるデザインによって現状を評価し直すか、概念をより広くとり今回考慮されていない面を含めて検討をし直すかのいずれかであろう。

例えば第4章のコスト面の現状把握について、聞き取り調査等を踏まえてはいるが、実態と実態に合致するかには疑問が残る。別の根拠に基づくデータによって見直しを行い、比較対照する必要があるかも知れない。

第6章の構造的な健康の概念に対しては、歴史により長期にわたる背景を考慮するのはどうだろうか。このとき、「西洋医学」と一括りにされるも

のとその外延のもつ、伝統的・文化的な部分に対しても、分析と考察を加え、同様に検討されるべきものであろう。その過程は、「医療に対する常識の相対化」を試みるにあたり、さらに高次の視点を見出すヒントを内蔵しているかも知れないからである。

この「最高の叩き台」を用いて、より妥当で正確な現状把握につとめ、本書が提示した疑問を問い直し、本書のとらえきれなかった面について分析・説明を試み、伝統医学や医療そのものの進むべき道を模索するという課題が、これからの研究者に向かって投げかけられているとってよい。

(浦山 きか)

[明石書店, 〒101-0021 東京都千代田区外神田  
6-9-5, TEL. 03 (5818) 1171, 2018年6月, A5判,  
276頁, 3,000円+税]

## 書籍紹介

大森弘喜 著

### 『フランス公衆衛生史——19世紀パリの疫病と住環境——』

初刊からやや日時を経たが、大森弘喜 著『フランス公衆衛生史——19世紀パリの疫病と住環境——』を紹介しておきたい。

日本の結核史を学んでゆくと、欧米先進国の結核の歴史的变化と、それぞれの国の社会、文化、医療が結核の歴史的变化に大きくかかわっていることを必ず感ずる。

紹介者は日本の結核史を調べながら、欧州の医学先進国であったフランスの結核の死亡率が他のヨーロッパ諸国に比べて、なぜ遅くまで高かったのかについて、いつも疑問を持っていた。

大森弘喜氏は本書の序「問題の所在と分析視角」において『結核は19世紀前半にすでにその流行が認められるものの、医学も公衆衛生学も全く拱手傍観していた。……フランスは19世紀前半、臨床医学で世界の先頭を走っていたが、病因

探求ではドイツに後塵を拝した。……ドイツでそれなりの成果を生んだサナトリウム方式を認めようとしなかった。……このようなフランス医学界の頑迷保守的な態度が、フランスの結核死亡率をヨーロッパでは例外的に高い水準に維持するに与って力があつたのである。……』と書き出している。次いで以下の章立てでパリの住環境から見たフランス公衆衛生史を述べている。

- 第1章 一九世紀パリの「不衛生住宅」問題
- 第2章 一八三二年パリ・コレラと「不衛生住宅」
- 第3章 一九世紀中葉における肺癆の流行
- 第4章 肺癆をめぐる病因学説
- 第5章 「国民病」としての結核—第三共和政前期のパリにおける結核蔓延
- 第6章 結核の予防と治療